

# 令和7年度 男女共同参画社会づくり作文コンクール



男女が互いにその人権を尊重し、責任をともに分かち合い、性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できる「男女共同参画社会」の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に、男女共同参画に関する作文を募集しましたところ、数多くの作品が寄せられました。

ここに、入賞作品をご紹介します。

作品応募総数 170点

(敬称略・五十音順)

## 【最優秀賞】

「普通」に潜む偏見をこえて

呉 羽 中学校2年 田中 美緒

## 【優秀賞】

私がしてもらったように

月 岡 中学校3年 奥洞 実緒

平等な世界へ

大沢野 中学校1年 佐藤 美羽

誰もが輝ける社会へ

八 尾 中学校2年 西田 萌莉

男女の家事・育児参加

片山学園 中学校2年 米田 倫

## 【佳作】

「らしさ」は、「自分らしさ」

西 部 中学校3年 秋田 礼生

誰でも活躍できる社会に

八 尾 中学校2年 岩脇 のどか

将来の夢と男女の違い

片山学園 中学校2年 大橋 琉凜

僕が男女共同参画について思うこと。

八 尾 中学校2年 印牧 蒼太

男女平等を目標に

八 尾 中学校2年 岸 瑞子

変えていくべき日本の社会

片山学園 中学校2年 坂越 美柚

男女平等制服に似合う髪型とは

城 山 中学校1年 中谷 俊太

見方・考え方を变える

呉 羽 中学校2年 細矢 優花

男女の一人称の違和感

岩 瀬 中学校2年 山口 新太

「ぼく」の家の男女共同参画」

呉 羽 中学校1年 山崎 光貴

男女差別が無い世界へ

八 尾 中学校1年 脇阪 優希

「普通」に潜む偏見をこえて

呉羽中学校2年 田中 美緒

男女平等が目指されている現代の社会。しかし、私は今でも「男だから…」「女だから…」といった言葉を耳にすることが多く、依然として男女を傷つける決めつけや偏見に満ちた行動や言動が、根強く残っていると感じる。

例えば、「男なんだから泣くな」という言葉。私はこの言葉を聞いたとき、胸が痛くなった。そんな決めつけがあると、自分の感情を押し殺してしまい、人としての自然な感情すら否定されてしまう気がする。あるドラマの中で、こんなセリフを聞いたことがある。「泣きたいときは我慢するな。笑いたいときはもっと我慢するな。」まさにその通りだと思う。人は、悲しいときや感動したときには、性別に関係なく泣いていいのだ。

また、「女だから力仕事はできないでしょ」という言葉も同様だ。こうした思い込みは、その人の可能性を狭め、自信を失わせる原因にもなりかねない。なぜ人は、性別だけでその人の能力や役割を決めつけてしまうのだろうか。

「男女共同参画社会」とは、単に権利を平等にすることだけではないと思う。性別という枠にとらわれず、お互いを理解し合い、認め合うこと。その姿勢があってこそ、本当の意味での「平等」が実現するのだと思う。

私は、全ての人が堂々と自分の個性を発揮し、それが尊重される社会をつくりたい。そして、誰もが生き生きと自分らしく生活できるようになってほしいと願っている。そのためには、まず私たち自身が「男だから…」「女だから…」といった言葉を無意識に使わないよう、日頃から意識することが大切だ。また、周囲の人との違いを受け入れ、尊重する柔軟さと優しさを持つことも欠かせない。それは一見、小さな一歩に思えるかもしれない。しかし、一人ひとりの意識や行動が少しずつ変わっていくことで、それがやがて大きな力となり、社会を動かす原動力になると思う。つまり、何事も「積み重ね」が重要なのだ。

性別にとらわれることなく、全ての人が自分の夢を追いかけられる。そんな社会を目指して、私も今、できることから行動していきたい。

優 秀 賞 (4 点)

## 私がしてもらったように

月岡中学校 3 年 奥洞 実緒

「お母さんの時代は男の子が生徒会長をするのが当たり前だったから、すごいなあ」という母の何気ない言葉が心に残っている。

私は、今、中学校で生徒会長をしている。昨年度の生徒会長も女子の先輩が務めていた。全校の前で堂々と、自信たっぷりに挨拶する姿に憧れた。「かっこいい」そう思った。

私が生徒会長に立候補するとき祖父に話をした。母の言葉を思い出し「女なのに」と言われるかもと心のどこかで思っていたが、いいじゃんと背中をおしてくれた。自分のしたいことを応援してもらえるのは、こんなに嬉しいことなのかと感じたことを覚えている。

そして、三年生になった道德の授業で、LGBTQ について学んだ。さまざまな性の在り方を大切にしようというキーワードだと知った。そこで、元バレーボール選手の滝沢なえさんの「自分がレズビアンだと打ち明けた後の反応が想像できなくて、不安だった。」という言葉聞いた。私は「女子なのにおかしい」と性別によって否定されたことはない。様々な性別が平等になるには、「LGBTQ の人だから気を遣おう。」という考え方ではなく、どんな人でも、相手を大切に思い合うことが重要だと思う。

私が、やりたいことを堂々とできているのは、周りの家族や先生、友達が否定せず、たくさん励ましてくれたおかげだと思う。このあたたかい環境に感謝しかない。だから、私も「女だから」男を好きになるものだ、「男だから」外に出て働くべきだ、なんて決めつけず、その人はその人、外側ではなく、内側をみていきたい。そして、絶対に、誰かの夢を、性別によって「無理だ。」と踏みにじりたくない。私が夢を応援してもらったように、「頑張れ。」と笑顔で背中をおしたい。ひとりひとりをみることに、それが私にできる男女共同参画の一步になると思っている。

## 平等な世界へ

大沢野中学校 1 年 佐藤 美羽

「なんで女子トイレのマークはスカートを履いている人のマーク、男子トイレはズボンを履いている人のマークなんだろう。」

ある日、私はお出かけをされていて違和感を感じました。女性でもズボンを履く人や、男性でもスカートを履く人だっているかもしれないのに、なぜトイレはそのようなマークなのか疑問に思いました。

SNSで動画を見ていると、可愛いものが好きな男の子やかっこいい服を着ている女の子が写っていたことがあります。そんなとき、「男の子なのに。女の子なのに。」などの差別するようなコメントを見かけたり、私もそのコメントと同じように思ったりしていました。私自身も性別に対して偏見をもっている、と気づき、私と同じように偏見をもって考えてしまっている人は、日本には、たくさんいるのかもしれない、と思いました。

近年、世界では男女差別のことで、「ジェンダーレス。ジェンダー平等」という言葉が話題になり、世界のさまざまな国で男女差別の問題の改善を進めています。それに対して日本では、『男女格差指数の最新版』によると、148ヵ国中、118位でした。私が思っている以上に、日本で男女差別に苦しんでいる人がたくさんいるのではないかと思います。

私のように性別に対して偏見をもっている人は、この世界にたくさんいるかもしれませんが。その考えは簡単には消せないかもしれないけれど、この考えのために苦しんでいる人がたくさんいることを思い浮かべることはできると思いました。

私たちはこの世界で生きる一員として、すべての人が性別など関係なく平等に、楽しい毎日を過ごしてほしいです。そのために私は、「自分と違う考え方があることを認め、相手を否定しない、相手を尊重する。」ということを心がけていきたいです。

## 誰もが輝ける社会へ

八尾中学校2年 西田 萌莉

今年の4月、地区のお祭りで獅子舞がありました。私は毎年見ている側でしたが、「やってみない？」と誘われて挑戦してみることにしました。しかし、思い返してみれば、これまで獅子舞で笛を吹いていた人たちはほとんどが男性でした。その光景を見て無意識に「笛吹き＝男性の役割」だと勝手に決めつけていたのです。でも、これは習慣や偶然であり、本当は誰でもやっていいことだと思います。

初めて練習に行ったときに地区の方々が、「女の子の笛吹き嬉しいな。来年、再来年も続けてね。」と優しく声をかけてくださりました。私はとても安心し、胸が温かくなり、不安が少しずつ和らいでいきました。練習を重ねるたびに、周りの人は私を性別ではなく、一人の笛吹きとして見てくれていることがわかりました。だんだん吹けるようになってきたときは褒めてくれ、間違えたときも笑いながら優しく教えてくれる。そこに男女の区別はありませんでした。

お祭り当日、観客の方々が私に、「女の子も笛吹いてるんだね。すごい、かっこいいね。」そう声をかけてくださりました。地域の方々も観客の方々も私を自然に受け入れてくれていることがとても嬉しかったです。「私もこの伝統を支える一員になれた」と強く感じました。

この経験を通して、私は気づきを得ました。性別によって役割を決めつけてしまうのは、本人の可能性を狭めてしまうということです。挑戦に性別は関係なく、その挑戦が伝統や周囲の考え方を少しずつ変えていけるのだと思います。この挑戦が私自身のためだけでなく、誰かの中の「当たり前」を変えるきっかけになれば良いと思います。このことから男だから、女だから、そんな枠に縛られずに、誰もがやりたいことに挑戦できる社会。そんな未来が少しでも近づいてくることを願っています。

## 男女の家事・育児参加

片山学園中学校 2 年 米田 倫

「近年の男性の家事・育児参加率はおよそ 3 割」自分は、この「参加率」という部分に違和感を覚えた。

我が家は両親ともに、医師をしていて、入れ替わるような形で家に一人しかいないというのも日常で、父母ともに家事をしていることが、我が家の「当たり前」であるのだ。

そんな時、「男性の家事・育児参加率」という言葉を知った。なぜ「参加してやっている」というような形なのか。ある時、学校で弁当を食べる時間がなく、友達に「残したらお母さん悲しむよ」と言われたが、その弁当は父が作ったものだった。

また、父が育児休暇をとった時、子供とスーパーに行くと、周りの人からは、奥さんに逃げられたのかというように見られたと聞いた。このようなことから、男が働き女は家事・育児をするという概念は昔とあまり変わっていないのかもしれないと思った。

しかし、現代社会において、女性の地位向上が進み、共働き家庭も少なくはない。つまり、男が働き女は家事・育児をするという概念は変わるのだ。どちらも働き、家事・育児をして、協力しながら生きていく。それが今必要なことである。そうすることで、男女間での差別が減り、より公平で公正な社会を築き上げることができる。そのためにはまず、男女で差をつくらない、「男性家事・育児参加率」が増えた。でなく、男女どちらも、参加するという形をつくる。身近な例で言えば育児休暇をとることがそれに値する。もし、これができれば、どちらかに負担がかかることもなく、仕事などへの姿勢をたもち、活躍することができる。

今、必要なことは、男性も家事・育児をして、夫婦で働き、家庭をつくるという形をとることだ。